時評

「新しい生活様式」以降

御手洗靖大

新型コロナウイルス感染症が世界的に明らかになって一年が経過した。研究生活では資料にアクセスしづらい日々が続き、勤務先の学校では、生活そのものがリスクとなることを思い知った。二〇二〇年は生活が大きく変容した年といえよう。

勤務先には、俳人の橋本直と安里琉太がおり、俳句の話を聞かせてもらったりする。コロナ禍による歌壇の反応を作品から分析したのが黒岩による一連の時評（七月、一〇月、一一月号）だが、俳壇はどうなのだろうか。歌壇との違いはあるだろうか。

「俳壇」五月号の時評、坪内稔典「読みを育てる濃厚接触」では、俳句における句会の重要性が説かれている。これは「俳句年鑑　二〇二一年版」（二〇二〇年一二月）の巻頭提言、井上弘美「ころを寄せる　ウィズコロナの時代に」など、コロナ禍の俳壇を展望するときには必ず言及される事柄である。短歌も歌会は重要であるが、ことに俳句は座の文芸であり、人が膝をつき合わせて語り合う句会が不可欠なのだと指摘される。それと関連して、コロナ禍で結社の退会者が増えたとする報告もある。歌壇でのこういった報告はそれほど聞かず、印象的だった。

角川「俳句」七月号では「7テーマで実践！身近な素材の見つけ方」と題した特集が組まれた。外出が規制された日常で、いかに句材を見つけるかというもの。俳句は素材を見つける、もっといえば、モチーフを取りにいく文芸なのだろう。

短歌においても、コロナ禍に何を詠むべきか大いに悩ましい。しかし、短歌は、歌の巧拙はともかくとしても、何を詠むべきか悩む我そのものを詠むことができる。コロナ禍で何を詠むかという問いは、そこまでとりあげられなかったように思う。外界にあるモチーフを取りに行く俳句はその点、難しさがあるのだろう。

モノを見せる俳句では、例えば、高橋睦郎がウイルスを詠む。

霾曇ヰルス汝は貌無しか　（「俳句α」二〇二〇夏号）

一方、池田澄子はコトを詠む。

やっと逢えて近づかないで初時雨（「短歌往来」一二月号）

俳句には季語がある。コロナ禍が季節性のもので済まなくなった現在、どのような季語とも取り合わせられることになった。俳句がモチーフをとりにいく文芸であるとするならば、コロナ禍という（少なくともう一年は）恒常的な状態よりも、その中で四季（＝季語）をとらえる方向へ向かうだろう。

高橋も池田もコロナが前景としてあるが、コロナ禍がこの先も続くのであれば、生活に浸透したコロナ関連のモノやコトが、もっと後景化する（では前景化するのは何か。季語だろうか。）可能性もあるのではないか（もちろん、そもそもコロナを詠まない俳人も多い）。コロナ禍をモチーフとしないが、コロナ禍以後の世界でしか詠まれない作品も生まれる可能性があると思うのである。

コロナ禍となって一年が経過した。新しい生活様式が浸透すれば、コロナがモチーフとならない作品も生まれよう。しかし、新しい生活様式の上に生きている我々は、そうでなかった我々とは違う句を、歌を、詠むようになっている気がする。